

内地帰還ニオリテノ感 昭和十一年二月九日

所属部隊 第八師團

所在地 宮古島

級等官 曹長 氏名



上陸第一歩隊概無量落敷切

官古島在島嶼間新聞ヲ見又人傳ニ聴ク敗戦ノ祖国ノ安人ノ情

心寒ミト上陸セルニ第一歩ニ聴ク幼イ子供一人、叔又サンネイニ脚五歩揮

コトヲ言ミテ今迄ノ寒イ氣持一時ニ晴ク感シヤハリ以國銘ッ

内地帰還ニオリテノ感 昭和 年 月 日

所属部隊

所在地

級等官

名氏

宮古島から浦賀への道は、極めて苦しい船路ではなかつた。精神的な苦
 れは、敗戦といふ事実が雄辯な物語でゐるとして、肉體的な苦痛を
 感じてなかつたことといま一度反省者として見なければならぬ。
 米國兵の吾々への對度を、そのまゝとつくり表面的に受入れる可きであ
 らうか？ 彼等の性情のナせる仕業とは、(表面的には)、血を同
 しくする人々の吾々への對度とそれを比べたとき、單純な答を出
 こ来る。その單純な答に、こまがけはなうない。こまがけは
 易い精神的な状態に置かされてゐる我々であり、四道がこれである
 一般國民にもある。且最後には結はれるもの、血を流すものはなうない
 新しい血の息吹を私は感じたい。
 働く手にも行く眼にも、私達の話しかけにも、私はその心を感じた。
 上陸第一歩 吹く風は冷くとも、私は強く深くその心を求める。

それは、吾々が、もたらす、可きが——
 三月四日宮古島へ 二月九日米國佐呂山流に南浦賀へ至る。